

### 32. 神津島の追い込み漁業潜水の潜水プロフィールに関する調査研究

芝山正治\*<sup>1)</sup> 水野哲也\*<sup>2)</sup> 古橋廣之進\*<sup>3)</sup>  
眞野喜洋\*<sup>1)</sup>

( \*<sup>1)</sup>東京医科歯科大学医学部公衆衛生学 )  
( \*<sup>2)</sup> 同 教養部保健体育 )  
( \*<sup>3)</sup>日本大学文理学部 )

伊豆七島・神津島の追い込み潜水漁業者を対象にダイビングレコーダを用いて潜水プロフィールの調査研究を行った。彼らは、SCUBA潜水で追い込み漁法を行っている新島・若郷地区の追い込み漁業潜水とは異なる潜水作業方法（建て切り）を採用しているが、減圧症に対する発症危険因子が高いことが知れたのでその結果を報告する。

【対象と方法】対象は、伊豆七島・神津島で建て切り（きんちゃく）漁業を行っている漁業潜水者32名である。

ダイビングレコーダは、ADR コンピュータシステム（アドニスエンジニアリング社製）を用い、潜水プロフィールの調査を行った。

【結果と考察】使用されている潜水器は、新島・若郷地区のSCUBA潜水と異なり、神津島では、マスク式潜水器を用いている。漁業潜水者の平均年齢は35.4歳であり、潜水経験年数は、平均14年である。建て切り漁業期間は、7～9月の3カ月間であり、この間の出漁率は、60%である。

出漁した場合の1日の網打ち回数は、1～3回と若郷地区とほぼ同じであった。しかし、1回の潜水時間は、SCUBA潜水と異なり、潜水時間の制限をうけない送気式潜水であるため15～28分であった。また、潜水深度は、深い方から浅い方への潜水を基本としているが、魚を浅い方へ追い込む作業が潮の影響などで困難な場合、最後の袋網作業の潜水深度は20m前後で作業をしていることがあり、平均の最終潜水深度は12～18mと若郷地区の10.5mよりも深い水深であった。

これらの結果から神津島での追い込み漁業による減圧症発症率は若郷地区の追い込み漁業よりも高いといえ、これを予防するためには、今後最終作業水深をより浅い深度での潜水作業に改めるように指導しなければならない。

### 33. 潜水漁業者の難聴について

竹内久美 毛利元彦  
(海洋科学技術センター潜水技術部)

【目的】潜水漁業者に対する現地調査を実施し、罹病率についての調査を行った。

【方法】12カ所の漁業協同組合（以下漁協と略す）において、現地調査を実施した。対象者は20歳～76歳の男女300名の現役の潜水漁業者であった。調査内容はアンケート調査及び血液検査等で、一部の漁協では聴力検査を実施した。

【結果及び考察】アンケート調査の結果では難聴や腰痛の訴えが多かった。難聴等、耳の疾患を訴える者は各漁協に存在したが、その割合には地域差がみられた。伊豆大島の某漁協では受験者の52%（平均年齢42.4歳）がまた、三浦半島の某漁協では受験者の43%（平均年齢42.1歳）が難聴や耳なりの症状を訴えた。これらの地域では若年の難聴者も多くみられた。このほか、伊豆下田周辺の“海女”にも難聴者が多くみられ、その割合は受験者の37%（平均年齢54.6才）であった。これに対し、同症状の訴え率が6%の低率を示した漁協もあった。このように難聴者が存在する漁協では、“潜り方”に問題があると思えた。さらに、これらの漁協では綿や粘土をそれに加工した植物の葉などで“耳栓”をして潜水する者が多く居るのを確認した。彼らが耳栓をする理由は“鼓膜穿孔”のためばかりではなく、下田周辺の“海女”達の中には、単に、“耳に水が入らないように”ということであった。このほか“海女”の中には腰痛を訴える者も多く居た。一方、“海士”では、肝機能異常の者が多く存在したが、これは潜水の影響よりもむしろ飲酒の影響と思われた。

【まとめ】潜水漁業者の中には“難聴”は免れ難い職業病であるという意識を持つ者が多い。しかし、今回の調査結果からもみられるように、潜水についての正しい知識を啓蒙することにより、その影響を最小限に防止できるものと思われる。